

# 妊娠後期における妊婦の快適性の現状と支援の検討

## The current status of prenatal comfort in the latter period of pregnancy and consideration of perinatal nursing

三里久美子 ケニヨン充子 岸田 泰子  
Kumiko Misato Michiko Kenyon Yasuko Kishida

キーワード：快適性、妊娠後期

key words : comfort, latter period of pregnancy

### 要 旨

- 目的：妊娠後期における妊婦の主観的な快適性の現状について、初妊婦・経妊婦を比較して明らかにし、妊婦の快適性を向上する支援を検討する。
- 方法：妊娠後期の妊婦 87 名を対象とし、既存の妊娠期快適性尺度 5 因子 35 項目を使用し、快適性の現状を質問紙調査した。
- 結果：因子ごとに初妊婦・経妊婦の 2 群間の差を検定したところ、第 1 因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】のみ有意差を認めた（初妊婦 43.3 点、経妊婦 37.2 点、 $p < 0.001$ ）。低得点者 9 名についての初妊婦・経妊婦の 2 群間比較および高齢妊婦群と非高齢妊婦群の比較では、妊娠期快適性平均得点に有意差を認めなかった。
- 考察：経妊婦に対する夫婦関係を促進する支援の充足およびマイナートラブル、夫婦関係、妊娠の受容や周囲からの支援の視点から妊婦と家族をみつめ、快適性に影響する個別的な要素を探る糸口を得て、快適性を向上する支援を提供する必要がある。

### I. はじめに

人の妊娠持続期間は、平均して 280 日間であり、この期間には、母体に様々な身体・心理的变化が生じ、その変化は、とくに妊娠後期において著しい。健康な妊婦であっても、身体的には子宮の増大や体重増加により腰背部痛、静脈瘤や浮腫等の不快症状を生じやすく<sup>1)</sup>、心理的にははじめて直面する妊娠に対して、生命の神秘を感じて感動や期待が大きい反面、未知の出産や子育てに対する不安も強く、そのギャップが心理的な負担を大きくし、精神的な不安定を生じやすい<sup>2)</sup>。このように、妊婦は、身体・心理面の変化に伴い様々な快、不快を体験している。

妊婦にとって、生命の神秘を感じ、これから生まれてくる新しい命への期待は快く感じ、反対に身体の痛みやマイナートラブル等により不快を感じる。先行研究では、マイナートラブルや精神的ストレス等、いわゆる不快な側面に焦点をあてた研究は数多くみうけられる<sup>3) 4) 5)</sup>。一方、中村ら<sup>6)</sup>は、妊婦の快適さの体験に焦点を当てた看護介入の効果として、妊娠生活の快適性および妊娠の受容を高めることを明らかにし、武石ら<sup>7)</sup>は、妊娠期の快適性に関する尺度開発を行っているが、このような妊婦の快の側面に焦点をあてた研究は少ない。厚生労働省は、国民運動計画、「健やか親子 21 (第 2 次)」において、「切れ目のない妊産婦、乳幼児への保健指導」を重点課題の一つとし

て取り組み<sup>8)</sup>、社会的にも妊婦への継続的な支援の促進が求められている。

さらに近年、出産年齢の高齢化や不妊治療の増加に伴い、妊娠期に異常を伴う妊婦が増加している。1日に数十人もの妊婦健康診査を行う医療機関の外来診療では、妊娠期の異常への対処や予防が優先され、異常やその兆候のない妊婦への快適性をより高めるような看護支援は二の次となってしまう可能性がある。太田<sup>9)</sup>は、妊婦の身体的特徴として、ちょっとしたきっかけで異常に移行しやすい健康状態であることを挙げ、健康状態を維持・増進していくために絶えず細心の注意を払う必要性を述べている。

これらのことから、妊娠期の異常を伴わない健康な妊婦であっても、妊娠期において快適性を維持・向上できる看護支援が重要であり、本研究では、子宮の著しい増大により不快症状より生じやすい妊娠後期における妊婦を対象とし、妊娠生活における快適性の現状を明らかにし、妊婦の快適性向上を目指す支援を検討したいと考えた。

## Ⅱ. 目的

本研究の目的は、第1に、首都圏に在住する妊娠後期の妊婦の主観的な快適性の現状について、初妊婦、経妊婦を比較し、明らかにすること、第2に、妊婦の快適性向上を目指す支援を検討することである。

## Ⅲ. 用語の定義

Kolcaba (1997)<sup>10)</sup>は、コンフォートを「緩和、安心、超越に対するニードが、経験の4つのコンテキスト（身体的、サイコスピリットの、社会的、環境的）において満たされることにより、自分が強められているという即時的な経験である」と定義している。この定義を参考に、「快適性」とは、「周囲からエンパワメントを得て、心身の苦痛が緩和され、満足し、安心して過ごすことができる程度」とした。

## Ⅳ. 方法

### 1. 調査方法

首都圏の総合病院および大学において実施されている妊娠期の母親および父親を対象とする集団教育に参加した妊娠後期の妊婦114名へ自己記入

式質問紙を配布し、研究参加への同意が得られた者のみ、会の終了後に設置した専用の回収箱に投函するよう依頼した。

### 2. 調査期間

調査期間は、2018年5月～2019年7月である。

### 3. 調査内容

#### 1) 基本属性

年齢、妊娠回数、妊娠週数および居住地域（市区町村）の4項目について記載を求めた。妊娠回数については、「このたびのご妊娠は何回目ですか」という質問項目であった。本研究において、初妊婦とは、初めて妊娠した者とし、経妊婦とは、今回の妊娠以前に妊娠歴、出産歴がともにある者および妊娠歴はあるが出産歴はない者を含むこととする。

#### 2) 妊娠期快適性尺度5因子35項目

武石ら<sup>7)</sup>の開発した5因子35項目から成る、妊娠期の快適性に関する尺度を使用した。回答方法は「全くあてはまらない(1)」「あてはまらない(2)」「あまりあてはまらない(3)」「少しあてはまる(4)」「あてはまる(5)」「よくあてはまる(6)」の6段階のリッカートスケールで、得点が高いほど快適性が高いことを示す。

第I因子、【父親へと成長する夫との関係性の深まり】は、夫が妊婦の自分とわが子への愛情を示す姿から、夫の父親への成長および夫婦の距離感が縮まっていくことによる快適性で、8項目から構成されている。

第II因子、【わが子の動きによる相互作用】は、胎動や超音波検査画像といったわが子の動きを、見たり感じたり共有したりする際の、わが子と自分との相互作用や周囲と自分との相互作用からの快適性で、7項目から構成されている。

第III因子、【周囲との交流による支え】は、家族や友人、妊婦や妊娠経験者、医療従事者などその妊婦をとりまく人的環境により得られる心強さや安心感といった快適性で、8項目から構成されている。

第IV因子、【母親になる実感とわが子への愛着】は、妊娠からこの先の未来までずっと一緒に関わり続けていくわが子への愛情と母親としての実感を膨らませていく過程での快適性で、7項目か

ら構成されている。

第V因子、【妊娠生活において変化する自分】は、妊娠により自分を中心にして起こる様々な変化から得られる喜びや楽しみといった快適性で、5項目から構成されている。尺度開発者らの検証において、尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は、0.95であり、全5因子においては $\alpha = 0.81\sim 0.92$ であること、2つの既存尺度と中程度の有意な正の相関を認めたこと等により、本尺度の信頼性および妥当性については確認されている。

### 3) 出産施設の選択理由、病院への希望、調査に対する意見等について

質問紙の最後に「施設を選んだ理由、施設への希望、本調査に対するご意見などがあれば自由にご記入ください」と表記し、自由記載を求めた。

## 4. 分析方法

得られたデータは、統計解析ソフトIBM SPSS Statistics version24を用い、統計学的分析を行った。基本属性は記述統計、快適性尺度得点は記述統計、データが正規分布に従う場合は $t$ 検定、正規分布に従わない場合はノンパラメトリック検定を用いて分析した。自由記載は、分析の補助資料として利用した。

## 5. 倫理的配慮

本研究は、著者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認(KWU-IRBA#17115)および研究参加施設の責任者の許可を得て実施した。研究参加者へは、研究の主旨、調査票は無記名であること、調査協力の有無による診療等への不利益を生じないこと、参加を辞退する場合は無記入のまま投函可能なこと、および学会等で発表する可能性があることを口頭および書面で説明した。最終的に記入済み調査票の回収箱への投函により、研究参加への同意が得られたものとした。

妊娠期快適性尺度の使用については、開発者らの許可を得た。

## V. 結果

調査票114部を配布し、90部を回収した(回収率79.0%)。そのうち未記入の項目が複数あるものは除外し、87部を分析対象とした(有効回答率96.7%)。

## 1. 基本属性

研究参加者の平均年齢は、 $32.3 \pm 5.1$ 歳、平均妊娠週数は、 $33.6 \pm 3.3$ 週、初妊婦54名(62.1%)、経妊婦33名(37.9%)であった。居住地は、86名(98.9%)が東京23区内であり、1名のみ他県であった(表1)。

## 2. 初・経妊婦における各因子平均得点の比較

妊娠期快適性尺度の各因子において、記述統計および $t$ 検定を用いて、初・経妊婦それぞれの平均得点の2群間の差を比較し、次のような結果を得た。なお、研究参加者87名中11名に、各1項目の未回答があり、因子ごとの合計平均得点を比較しているため、未回答項目がある者は、該当因子の分析データから除外した。等分散性のためのLeveneの検定において、第I因子のみ有意確率が0.049であったが、正規分布から少々外れている場合は結果への影響を受けにくい $t$ 検定の結果を解釈し、さらにMann-WhitneyのU検定により確認した。

第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】、8項目の平均得点は、初妊婦43.3点、経妊婦37.2点と、初妊婦の方が高得点であり、2群間に有意差を認めた( $p < 0.001$ )。Mann-WhitneyのU検定においても同様に2群間に有意差を認める結果であった( $p < 0.001$ )。

第II因子【わが子の動きによる相互作用】、7項目の平均得点は、初妊婦37.5点、経妊婦36.2点( $p = 0.179$ )、第III因子【周囲との交流による支え】、8項目の平均得点は、初妊婦40.9点、経妊婦38.9点( $p = 0.106$ )、第IV因子【母親になる実感とわが子への愛着】、7項目の平均得点は、初妊婦37.0点、経妊婦36.9点( $p = 0.955$ )、第V因子【妊娠生活において変化する自分】、5項目の平均得点は、初妊婦20.0点、経妊婦18.7点( $p = 0.292$ )であり、第IIから第V因子においては、2群間に有意差を認めなかった(表2)。

## 3. 低得点者の各因子合計得点の初・経妊婦における比較

研究参加者87名のうち、合計得点の低い者から約1割にあたる、9名について各因子における初・経妊婦それぞれの平均得点を記述統計およびMann-WhitneyのU検定により2群間の差を比

表1 研究参加者の属性

	初妊婦 $n = 54$ 平均値 $\pm$ $SD$	経妊婦 $n = 33$ 平均値 $\pm$ $SD$	全体 $N = 87$ 平均値 $\pm$ $SD$
平均年齢 (歳)	31.4 $\pm$ 5.2	33.9 $\pm$ 4.6	32.3 $\pm$ 5.1
妊娠週数 (週)	33.2 $\pm$ 3.3	34.2 $\pm$ 3.2	33.6 $\pm$ 3.3

表2 妊娠期快適性尺度平均得点 (初・経妊婦別)

	$n$	初妊婦 平均値 $\pm$ $SD$	$n$	経妊婦 平均値 $\pm$ $SD$	$t$ 値 ( $df$ )	$p$ 値
I 父親へと成長する夫との関係性の深まり	52	43.3 $\pm$ 5.2	33	37.2 $\pm$ 6.5	4.79 (83)	< 0.001
II わが子の動きによる相互作用	54	37.5 $\pm$ 4.4	32	36.2 $\pm$ 4.4	1.35 (84)	0.179
III 周囲との交流による支え	54	40.9 $\pm$ 6.2	33	38.9 $\pm$ 5.0	1.63 (85)	0.106
IV 母親になる実感とわが子への愛着	54	37.0 $\pm$ 4.6	33	36.9 $\pm$ 5.3	0.06 (85)	0.955
V 妊娠生活において変化する自分	48	20.0 $\pm$ 5.0	30	18.7 $\pm$ 5.5	1.06 (76)	0.292

対応のない  $t$  検定

較した。分析対象である9名全員に未回答項目はなかった。

低得点者9名の平均年齢は、31.9歳  $\pm$  4.8歳であり、35歳以上の高齢妊婦は9名中3名であった。平均妊娠週数は、34.4  $\pm$  2.4週、初妊婦5名(55.6%)、経妊婦4名(44.4%)であった。第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】、8項目の平均得点は、初妊婦35.0点、経妊婦32.5点 ( $p = 0.730$ )、第II因子【わが子の動きによる相互作用】、7項目の平均得点は、初妊婦29.8点、経妊婦30.0点 ( $p = 1.000$ )、第III因子【周囲との交流による支え】、8項目の平均得点は、初妊婦33.8点、経妊婦33.5点 ( $p = 0.905$ )、第IV因子【母親になる実感とわが子への愛着】、7項目の平均得点は、初妊婦28.0点、経妊婦28.8点 ( $p = 0.556$ )、第V因子【妊娠生活において変化する自分】、5項目の平均得点は、初妊婦13.2点、経妊婦12.8点 ( $p = 0.905$ ) であり、すべての因子においては、2群間に有意差を認めなかった(表3)。

#### 4. 各因子合計得点の年齢による比較

研究参加者87名を35歳以上の高齢妊婦59名(67.8%)と35歳未満の非高齢妊婦28名(32.2%)の2群に分け、記述統計および  $t$  検定を用いて、各因子平均得点の2群間の差を比較し、次のような結果を得た。未回答項目がある者は、該当因子

の分析データから除外した。

第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】、8項目の平均得点は、非高齢妊婦40.9点、高齢妊婦41.0点 ( $p = 0.944$ )、第II因子【わが子の動きによる相互作用】、7項目の平均得点は、非高齢妊婦37.5点、高齢妊婦36.0点 ( $p = 0.145$ )、第III因子【周囲との交流による支え】、8項目の平均得点は、非高齢妊婦40.2点、高齢妊婦40.1点 ( $p = 0.942$ )、第IV因子【母親になる実感とわが子への愛着】、7項目の平均得点は、非高齢妊婦37.2点、高齢妊婦36.6点 ( $p = 0.591$ )、第V因子【妊娠生活において変化する自分】、5項目の平均得点は、非高齢妊婦19.0点、高齢妊婦20.6点 ( $p = 0.214$ ) であり、すべての因子においては、2群間に有意差を認めなかった(表4)。

全因子において、2群間のサンプル数に差があるため、さらに Mann-Whitney の  $U$  検定を用いて検定を行ったところ、同様に2群間に有意差を認めなかった(第I因子より順に  $p = 0.891, 0.226, 0.706, 0.282, 0.362$ )。

#### 5. 自由記載

4名の初妊婦と3名の経妊婦から自由記載を得られた。内容は、無痛分娩、母児別室の希望、分娩施設選択理由として、自宅からの距離が近い、総合病院であること、口コミであることが記載さ

表3 妊娠期快適性尺度平均得点（低得点者の初・経妊婦別）

	初妊婦 <i>n</i> = 5 平均値 ± <i>SD</i>	経妊婦 <i>n</i> = 4 平均値 ± <i>SD</i>	<i>p</i> 値
I 父親へと成長する夫との関係性の深まり	35.0 ± 7.4	32.5 ± 7.2	0.730
II わが子の動きによる相互作用	29.8 ± 2.4	30.0 ± 0.8	1.000
III 周囲との交流による支え	33.8 ± 3.6	33.5 ± 4.2	0.905
IV 母親になる実感とわが子への愛着	28.0 ± 4.4	28.8 ± 8.3	0.556
V 妊娠生活において変化する自分	13.2 ± 4.0	12.8 ± 5.2	0.905

Mann-Whitney の U 検定

表4 妊娠期快適性尺度平均得点（年齢2区分別）

	<i>n</i>	35歳未満 平均値 ± <i>SD</i>	<i>n</i>	35歳以上 平均値 ± <i>SD</i>	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )	<i>p</i> 値
I 父親へと成長する夫との関係性の深まり	57	40.9 ± 6.6	28	41.0 ± 6.1	-0.07 (83)	0.944
II わが子の動きによる相互作用	59	37.5 ± 3.9	27	36.0 ± 5.2	1.47 (84)	0.145
III 周囲との交流による支え	59	40.2 ± 6.1	28	40.1 ± 5.3	0.07 (85)	0.942
IV 母親になる実感とわが子への愛着	59	37.2 ± 5.2	28	36.6 ± 4.0	0.54 (85)	0.591
V 妊娠生活において変化する自分	53	19.0 ± 5.6	25	20.6 ± 4.3	-1.25 (76)	0.214

対応のない *t* 検定

れていた。

## VI. 考 察

### 1. 妊娠後期における妊婦の主観的な快適性の現状

妊娠期快適性尺度の各因子において、初・経妊婦それぞれの平均得点の比較では、第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】のみ初妊婦の平均得点が経妊婦より有意に高い結果であった。この因子は、尺度開発者らによると、夫が妊婦の自分とわが子への愛情を示す姿から、夫の父親への成長および夫婦の距離感が縮まっていくことにより得られる快適性である<sup>7)</sup>。したがって、経妊婦の夫は、上子の誕生からすでに父親として成長、存在しているため、経妊婦は次子の妊娠中に夫の父親への成長を改めて感じる事が少ないのではないかと考えられる。

また、一般に、結婚当初から10年までの結婚満足度は、結婚年数の経過とともに緩やかに低下していくと言われており<sup>11)</sup>、小野寺<sup>12)</sup>の夫婦関係の変化に関する縦断研究の結果では、夫婦の親密性尺度得点は、夫婦ともに親になる前に比べ、

親になった2年後は有意に低下していた。これらの一般的な夫婦の結婚満足度や親密性の変化から、経妊婦は初妊婦より婚姻年数が長く、初妊婦であった時と比べ、夫婦の満足度や親密性が低下し、夫婦の距離感が縮まっていくという実感を抱きにくい可能性が考えられる。

これらのことから、第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】の経妊婦の平均得点が、初妊婦と比較して有意に低い結果となったと考えられる。

小川ら<sup>13)</sup>が同様の尺度を用いて就労妊婦の快適性の特徴を明らかにした先行研究では、第I因子において、就労妊婦および非就労妊婦に快適性の有意差は妊娠中のどの時期においても認めなかった。そのため、結婚満足度や夫婦の親密性の経時的な低下は、経妊婦の快適性を低下させる要因のひとつであると言え、看護者は、就労の有無に関わらず、とくに経妊婦の夫婦関係を促進する関りを意図的に行っていく必要がある。

第IIから第Vの4因子の平均得点は、初妊婦および経妊婦に有意差を認めなかったことから、これらの4因子においては、過去の妊娠経験の有無

による妊婦の快適性への影響は少ないと言える。

## 2. 妊娠後期における快適性が低い妊婦の現状

妊娠期快適性尺度5因子35項目の合計得点の低い者から約1割にあたる9名において、初・経妊婦はそれぞれ約半数ずつであり、平均年齢は全体平均との差が-0.4歳、妊娠週数は全体平均との差が+0.8週であったことから、出産体験の有無、年齢や妊娠週数に全体平均年齢と大きな差はなく、低得点者に属性の際立った特徴はみられなかった。自由記載からは、快適性が低い個別の要因を示唆する具体的内容は読み取れなかった。

妊娠期快適性の平均得点では、研究参加者全体では第I因子においてのみ初・経妊婦に有意差を認めたと、低得点者においては、5因子すべてにおいて、初・経妊婦に有意差を認めず、全因子において、全体平均得点を下回っていた。

これらのことから、快適性を低くする要因は、年齢、週数や過去の妊娠経験の有無に関わらず、個別的な要素であると考えられる。

川崎ら<sup>14)</sup>は、妊娠期の自己管理(栄養管理、分娩・育児関連の準備)が産後1カ月の育児肯定感に影響を及ぼすことを明らかにしていることから、妊婦自身の自己管理行動レベルから産後の育児への影響の有無を予測できると言える。妊娠中に自己管理行動が不足する場合は、一般に腰痛や浮腫等のマイナートラブルが増強しやすく、第5因子【妊娠生活において変化する自分】の快適性が低くなる可能性が考えられる。このことから、マイナートラブルの出現状況や第I因子の構成要素より夫婦関係、第IIおよび第IV因子の構成要素よりわが子への愛着や相互作用が促進されるような望んだ妊娠であるか、妊娠の受容はどうか、第III因子の構成要素より周囲からの支援状況はどうかという視点で妊婦と家族をみつめ、快適性へ影響する個別的な要素を探ると、支援の糸口を得られる可能性があると考えられる。

## 3. 妊娠後期における快適性の高齢妊婦、非高齢妊婦の比較

35歳以上の高齢妊婦と35歳未満の非高齢妊婦の平均点の比較では、全ての因子において有意差を認めなかったことから、年齢から妊婦の快適性を予測することは難しい。前原ら<sup>15)</sup>は、高年初

産婦に特化した産後1ヵ月までの子育て支援ガイドラインのケアの有用性が対象者にとって高いことを明らかにしている。一方、岩田ら<sup>16)</sup>は、超高齢妊婦への支援と他職種連携に関する保健医療専門職者の認識について明らかにした研究で、多くの専門職者は、超高齢妊産婦を特別視する必要はなく、年齢にかかわらず個別に妊産婦の状態を把握して対応することが重要であると考えていたと述べている。

高齢妊婦の快適性に関する先行研究はなく、その現状は明らかになっていないため、今後明らかにしていく必要がある。前原ら<sup>15)</sup>は、先に述べたように、産後1ヵ月における高齢初産婦に特化した支援の有用性を明らかにしているが、本研究の結果からは、年齢を考慮した快適性向上の支援を行うというより、岩田ら<sup>16)</sup>の研究で多くの保健医療専門職者が考えていたように、年齢にかかわらず個別に妊婦の状態を把握し対応する必要があると考える。

## 4. 妊娠後期における妊婦の快適性向上を目指す看護への示唆

武石ら<sup>7)</sup>が開発した妊娠期快適性尺度の構成因子より、妊娠期の快適性は、夫との関係性、母子および妊婦と周囲との相互作用、人的な支え、愛着形成や妊娠に伴う心身の変化の様々な側面から影響を受けて変化する。

塚田ら<sup>17)</sup>は、母親が抱く授乳に関する困難感と対処行動を明らかにした研究で、初産婦と経産婦が抱く授乳に関する困難感には違いがあることを述べている。しかし、研究者の経験から病院や地域で開催されている産前教室等の集団教育の場への参加者は、初妊婦が圧倒的に多い現状であり、経妊婦自身から、「2人目だから大丈夫です」という言葉をしばしば耳にしたことがある。

本研究の結果から明らかになった、第I因子においてのみ経妊婦は初妊婦より快適性が有意に低いこと、および先行研究で明らかになっている夫婦の親密性は親になった2年後には有意に低下すること、育児に関する困難感の内容は初産婦で異なることから、経妊婦に対する看護支援を怠ることはできない。本研究の結果から、経妊婦の快適性をより向上させるためには、初妊婦以上に夫婦関係の促進を意図的に図る必要がある。

具体的支援としては、夫婦が妊娠、出産、育児についての意見交換を通して夫婦間コミュニケーションを促進すること、妊娠期の集団教育内容を見直し、妊婦がより快適に過ごすという目的を組み入れた内容を検討すること、妊娠の早い時期から妊婦だけでなく、夫も巻き込み夫婦単位の保健指導を提供していくことなどが考えられる。今後、さらに研究を積み重ね、対象者のニーズや特徴を調査し、妊婦の快適性を高める支援プログラムを開発していく必要がある。また、妊婦健康診査において、異常の早期発見と予防の看護に没頭していると、快適性が低い妊婦を見逃す可能性があり、年齢、妊娠週数、過去の妊娠経験の有無に関わらず、快適性尺度を構成する5つの因子の視点から、対象を多面的にアプローチし、快適性が低い個別的な要素を探索し、支援につなげていくことが望まれる。

## 5. 研究の限界

本研究の分析対象は87名であり、結果を一般化することは難しい。また、本調査の結果から、快適性尺度、第V因子の1項目について、87名中9名が未記入であり、質問の意味が妊婦へ十分伝わらなかった可能性がある。今後は、さらなるデータの集積と尺度の再検討を行っていく必要がある。

## VII. 結論

妊娠期の集団教育に参加した首都圏に在住する妊婦87名の妊娠後期における妊婦の快適性の現状を比較、検討した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 初妊婦、経妊婦の快適性を比較した結果、第I因子【父親へと成長する夫との関係性の深まり】のみ、両者に有意差を認め、経妊婦に対する夫婦関係を促進する支援の充足が望まれる。
2. 快適性得点の低い初妊婦、経妊婦の快適性を比較した結果、両者に有意差および属性の際立った特徴を認めず、看護者は、妊婦のマイナートラブル、夫婦関係、妊娠の受容、周囲からの支援の視点から妊婦と家族をみつめ、快適性に影響する個別的な要素

を探る糸口を得て、支援につなげていくことが必要である。

3. 高齢妊婦と非高齢妊婦の快適性を比較した結果、両者に有意差を認めず、年齢にかかわらず個別に妊婦の状態を把握し、快適性を向上する支援を提供する必要がある。

本研究は、2018～2019年度千代田学の助成を受け研究を行った。本研究の一部は、第60回日本母性衛生学会学術集会で発表した。

## 謝 辞

本研究へご協力をいただいた妊婦の皆さま、および研究参加施設の産科病棟師長、三木美代子氏およびスタッフの皆さまへ心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 森恵美：系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学2，医学書院，119-120，2018。
- 2) 我部山キヨ子，菅原ますみ編：助産学講座4 基礎助産学 [4] 母子の心理・社会学，87，2018。
- 3) 新川治子，島田三恵子，早瀬麻子，他：現代の妊婦のマイナートラブルの種類、発症率、及び発症頻度に関する実態調査，日本助産学雑誌，23(1)，48-58，2009。
- 4) 島袋香子，新井陽子，高橋真理：妊婦のストレス対処パターンと母親役割への精神的適応状態との関連，母性衛生，49(4)，522-530。
- 5) 安田真悠，乾つぶら，五十嵐稔子：妊娠期のマイナートラブルやストレス対策としての生活行動（非運動性活動熱産生：NEAT）の重要性，奈良看護紀要，13，27-36，2017。
- 6) 中村康香：妊娠経過における妊娠の受容を高める看護援助の効果 快適さの体験に焦点を当てた看護介入を行って，日本母性看護学会誌，8(1)，1-8，2008。
- 7) 武石陽子，中村康香，跡上富美，他：妊娠期の快適性に関する尺度の開発，日本母性看護学会誌，11(1)，11-18，2011。
- 8) 厚生労働省：健やか親子21（第2次）ホームページ，sukoyaka21.jp/about（2020.01.06検索）
- 9) 太田操編：ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程 第2版，医歯薬出版株式会社，13，2016。
- 10) キャサリン・コルカバ：コンフォート理論 理論の開発過程と実践への適用，太田喜久子監訳，医学書院，15-19，2008。
- 11) 柏木恵子，平木典子編：日本の夫婦 パートナーとやっていく幸せと葛藤，金子書房，2-18，2014。
- 12) 小野寺敬子：親になることにともなう夫婦関係の変化，発達心理学研究，16(1)，15-25，2005。
- 13) 小川彩，中村康香，跡上富美，他：就労妊婦における妊娠期の快適性の特徴，母性衛生，56(2)，

- 292-300, 2015.
- 14) 川崎寿磨子, 森本眞寿代, 中村美佳, 他: 初産婦の産後1ヵ月の育児肯定感に影響を及ぼす要因妊娠期の自己管理及び産後うつとの関連, 母性衛生, 59(4), 672-680, 2019.
  - 15) 前原邦江, 森恵美, 岩田裕子, 他: 高年初産婦に特化した産後1ヵ月までの子育て支援ガイドラインの有用性の評価, 母性衛生, 59(4), 842-852, 2019.
  - 16) 岩田裕子, 森恵美, 前原邦江, 他: 超高齢妊産婦への支援と多職種連携に関する保健医療専門職の認識 自由記述の内容分析, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 41, 35-44, 2019.
  - 17) 塚田幸乃, 河島亜希子, 大田まゆみ, 他: 退院後から産後1ヵ月健康診査までに母親が抱く授乳に対する困難感と対処行動, 母性衛生, 57(4), 709-717, 2017.